

一般演題(口演)1

学校保健①

座長：青柳
吉原

直子 (茨城大学教育学部 養護教諭養成課程)
重美 (獨協医科大学小児科学 同病院アレルギーセンター)

O1-005

小児科クリニックにおける「医療教育コーディネーター」の配置とその効果(第2報)

松野 泰一¹⁾、秋山千枝子¹⁾、内藤真紀子¹⁾、
森山 徹¹⁾、竹原 健二²⁾

¹⁾医療法人社団千実会 あきやま子どもクリニック、

²⁾国立研究開発法人 国立成育医療研究センター

【目的】あきやま子どもクリニックでは、令和5年度から元小学校長を雇用した「医療教育コーディネーター」(以下「MEC」)を配置し、医師の指示に基づき予約制の「医療教育相談」によって就学前から学齢期の子どもや保護者の相談を行っている。MECは、発達の課題によって起きる集団不適応や不登校、対人関係のトラブル等、学校生活に悩みを持って相談に来院する子どもに対して、学校の仕組みや実態を熟知している立場から学校における環境調整等の助言をしている。さらに、クリニック近隣の学校との積極的な連携を図って医療と教育をつなぐ取組を進めてきており、その効果を報告する。【対象と方法】令和5年度および令和6年度上半期の1年半で担当した相談件数はのべ325件、実人数では125人のクライエントに助言を行った。【結果】125人中のうち不登校や登校しぶり45人について経過を追うと、学校復帰した子どもや登校日数が増加した子どもが29人、約3分の2に当たる。それ以外の80人についても、就学不安、特別支援学級や通級利用の相談を含む学校不適応のケースが多く、その中に今後不登校や登校しぶりになると想られる子どもが存在していた。【考察】相談内容の多くは、友人関係のトラブルや学習について行けないなどの学校生活上の悩みを抱えている。そして、それが不登校や登校しぶりにつながることが多く、MECは、相談の中で学校が可能だと考えられる支援や配慮を保護者に提案するほか、保護者の承諾を得た上で学校と情報共有をして、学校側の環境調整を提案する働きをしている。また、MECが学校に出向き、校長の許可を得た上で授業観察を行って学習や生活の様子を把握し、クリニックに持ち帰って医師とのカンファレンスで方向性を確認したり、次回の相談時に保護者に学校での様子を伝えたりするなどによって、学校・家庭・医療機関が一貫した支援を行える取組を進めていることで一定の成果が上がっていると考えられた。また、連携している学校側の受け止めとしては、学校のことをよくわかっている立場から保護者への助言をしていることについて肯定的な評価があり、学校と医療機関が伴走して子どもたちの支援を行っていることへの安心感が得られていた。【結語】MECの配置は医療機関と学校との双方に有効な作用があると捉えることができ、不登校や登校しぶりの改善と予防に一定の効果があると考えられた。

O1-006

中学生における給食前の食欲と生活習慣との関連性

村上亞由美¹⁾、竹内 恵子¹⁾、岸本三香子²⁾

¹⁾福井大学 教育学部、

²⁾武庫川女子大学 食物栄養科学部 食物栄養学科

【目的】学校給食は児童・生徒の成長及び健康の維持に必要な栄養を摂取でき、食べ物の大切さや関わる人への感謝を学ぶ機会であるが、残食が課題に挙げられている。本研究では、給食の残食を減らすことを目的とし、給食前の食欲に影響を与える生活習慣として運動習慣、睡眠時間、スクリーンタイム、喫食時刻などとの関連性を分析した。

【方法】調査は、福井県内中学校3校の第2学年を対象に、2024年10月上旬に実施した。Google Formのアドレスを記載した調査用紙を授業時に配布し回答(1校は、家庭で回答)してもらい、調査に同意した回答のみ集計した(有効回答211人、回収率68.1%)。調査項目は、身長と体重(自己申告値)、通学手段と所要時間、所属クラブ、平日の各曜日の運動時間数、睡眠時間数、空腹感のある時刻(複数回答)、喫食時刻(複数回答)、給食(ごはん、おかず別)の残食状況とした。集計と統計解析には、Microsoft Office Excel 2021及びIBM SPSS Statistics 25を用いた。福井大学教育・人文社会系部門教員養成領域倫理審査委員会にて承認を受けた(承認第140号)。

【結果】給食前の時間帯である11時と12時に「食欲がある」と回答した生徒は80.0%であった。「地域クラブ等」に在籍していた生徒では、「食欲あり」40.3%、「食欲なし」25.0%であった。在籍により平日では平均30分～1時間ほど運動時間が長く、1週間では運動時間は470分間長かった。睡眠時間は、平均約32分間長かった。「給食前の食欲」と「スクリーンタイム」には有意な関連がみられ、「食欲あり」では「2時間以上3時間未満」30.3%で最も高かった。「食欲なし」では「5時間以上」29.5%で最も高く、「5時間以上」と回答した生徒において「食欲なし」の割合は48%であったことから、スクリーンタイムは5時間以上になると食欲に大きな影響を与えることが示唆された。給食の残食について、「食欲あり」の生徒では、「ごはんを残さない」85.2%、「おかずを残さない」82.3%であった。「食欲なし」の生徒では、ごはん、おかずとも同割合で、「残さない」72.7%、「ときどき食べ残す」15.9%、「よく食べ残す」11.4%と残食頻度が高かった。

【結論】スクリーンタイムを減らし、運動時間、睡眠時間を増やすことで給食前の食欲を改善し、給食の残食を減らすことが期待できることが示唆された。